



1\_ほてりが残るアスファルトを舞台に、<sup>あて</sup>艶やかで力強い踊りを披露した桜室連(むろね夏まつり) / 2\_足取りも軽やかに、跳躍を見せる奥玉小の児童(千厩夏まつり) / 3\_旧藤沢高生徒を中心に結成された藤沢 YOSAKOI 炎武は、第26回藤沢野焼祭から15年も踊り続けている

# 響



盆踊りに興じる参加者。熱を帯びた会場に屋根音頭が鳴り響く(むろね夏まつり)

# 祭りの鼓動、大地を揺らす

天気予報の予想最高気温の欄には、顔をしかめたくくなるような数字が並ぶ。今年の夏は、立秋を過ぎても暑さが衰えなかった。7月30日の「千厩夏まつり」を皮切りに、始まった一関の夏祭りは、送り盆の恒例行事となった8月16日の「かわさき夏まつり花火大会」で幕を閉じた。地域の歴史や文化が香る一関の夏まつりは、その一つ一つに魂が宿る。心踊らせ、胸弾ませた夏の瞬間をカメラが追った。



4\_一関の東西を結ぶ北上大橋の上で大輪の花が咲いた(かわさき夏まつり花火大会) / 5\_二代目時の太鼓の大巡行では迫力の演奏と踊りが繰り広げられた(一関夏まつり) / 6\_ごうごうと音を立てる猛火。集落ごとに土器を窯で焼き上げる(藤沢野焼祭)



ロケットのように高速で直進する「綱火」

手筒花火は、古くから情報伝達の手段として使われてきた狼煙が原型とされる。五穀豊穡や無病息災、武運長久などを祈願する神社の奉納行事として発展。現在でも三河地方の各地で毎年行われている。一関の手筒花火は、2000年の第49回夏祭りのイベントとして初披露したのが始まり。今回は、一関手筒煙火愛好会のメンバーらが、大5本、中10本、小15本の計30本を放揚。また、豊川進雄神社で花火を奉納する関係者の手で、横に貼った綱の上を火花が走る「綱火」(愛知県指定無形民俗文化財)を披露した。



微動だにせず、火の粉に耐える挙げ手

魂のろしをあげよ  
七夕と花火彩る一関

第65回一関夏まつりの最後を締めくくった手筒花火は、愛知県三河地方に伝わる伝統の花火。

1メートルほどの竹筒に火薬を詰め、それを人が抱えながら放揚する。点火すると、轟音と共にオレンジ色の火柱が10数メートル吹き上がる。

挙げ手は、降りしきる火の粉をものともせず、仁王立ちで花火を抱え続ける。筒から吹き上がる火柱が夜空を焦がす。最後は「ハネ」と呼ばれる炎が大音響とともに足元に勢いよく吹き出して幕を閉じる。

# 競



7\_地元商店街を踊り手と手作りの山車が練り歩いた(千厩夏まつり) / 8\_最高賞の塩野半十郎大賞を受賞した佐藤由幸とオールスターズの「炎神」(藤沢野焼祭) / 9\_16チームが餅つき勝負。会場では、約50種類の餅料理が振る舞われた(花泉夏まつり)

10\_盆の迎え火に合わせ、小僧姿の児童33人がちょうちんを手に行進した(摺沢水晶あんどん祭り) / 11\_新成人が手作りのだるまを担いで商店街を駆け抜けた(大原だるま祭り) / 12\_6団体、総勢500人余りが威勢の良い掛け声をあげて神輿を担いだ(一関夏まつり)



# 協